

# 米国とイランの対立が激化する歴史的背景

一橋大学大学院経営管理研究科 特任教授

藤田 勉



## 1. 本格化する米国とイランの衝突

2020年は、米国がイラン革命防衛隊司令官を殺害するという衝撃的な事件で幕を開けた。これに対して、イランは、欧州などとの核合意を事実上破棄して、核開発を加速するであろう。

中東をめぐる視点は複雑である。欧米において、イスラム教徒を危険視することが見受けられる。たとえば、米国トランプ大統領は

2017年にイスラム教徒の多い国を中心に入国制限を実施した。そして、欧州でもイスラム教徒の移民に対して拒否反応が強い。

しかし、中東から見ると逆に見えるのかもしれない。歴史的に、中東は多くの異民族の侵略と支配を受けてきた。古代から欧州諸国は中東を侵略し、20世紀以降は、欧米は中東に対する介入を強めた。つまり、中東から見ると、中東は欧米の「被害者」でもあると言える。

歴史的に、世界的な株価下落の原因の多くが地政学要因であり、さらに中東に関連したものが少なくない。このため、世界の金融市場の分析において、中東の重要性は高い。

昨年8月号の「歴史で読み解く世界の金融市場」(3)：米国がイランと激しく対立する歴史的背景」において、「米国とイランの緊張関係はいずれも長期化し、さらに激化する可能性がある」と結論付けた。事態が大きく動いただけに、本稿では米国とイランの対立の本質を再検討する。とりわけ、ややもすれば悪者にさ

### 目次

1. 本格化する米国とイランの衝突
2. 外敵からの侵攻を受け続けた中東
3. 高度な文明を築いた中東
4. 欧州列強の支配と米国の介入
5. イランが各地のシーア派を支援
6. 米国がイランを敵視する最大の理由
7. 米国とイランの対立は長期化しよう

(図表1) 日本株歴代下落相場 (TOPIX、太字は中東要因)

| 株価下落要因                             | 高値      | 安値      | 下落率 (%) | 下落期間  |
|------------------------------------|---------|---------|---------|-------|
| 1 バブル崩壊 (湾岸戦争)                     | 2884.8  | 1102.5  | -61.8   | 2年9ヵ月 |
| 2 リーマン・ショック (東日本大震災、ユーロ危機)         | 1816.97 | 695.51  | -61.7   | 5年4ヵ月 |
| 3 ドッジ不況                            | 22.06   | 9.59    | -56.5   | 1年2ヵ月 |
| 4 ITバブル崩壊 (アフガン戦争、イラク戦争)           | 1754.78 | 770.62  | -56.1   | 3年1ヵ月 |
| 5 金融危機 (アジア危機、LTCM危機)              | 1722.13 | 980.11  | -43.1   | 2年4ヵ月 |
| 6 日本列島改造 boom 崩壊 (第一次石油危機、変動相場制突入) | 422.48  | 251.96  | -40.4   | 1年9ヵ月 |
| 7 40年不況                            | 126.59  | 81.29   | -35.8   | 4年    |
| 8 スターリン暴落                          | 42.18   | 28.46   | -32.5   | 2ヵ月   |
| 9 円高 (1ドル79.75円)                   | 1712.73 | 1193.16 | -30.3   | 1年    |
| 10 第二次石油危機                         | 603.92  | 511.52  | -15.3   | 1年    |

(出所) 日本取引所グループ

れがちな中東やイランの立場から、この問題がどのように見えるかを中心に議論を展開する。

## 2. 外敵からの侵攻を受け続けた中東

中東は、アジア、アフリカ、欧州の結節点にあり、古代から中世まで世界で最高水準の文明があった。このため、中東は、古代のマケドニア王国、ローマ帝国、十字軍、モンゴル帝国、オスマン帝国など多くの異民族の侵略を受け続けてきた。

中東を最初に支配したのは紀元前6世紀に誕生したアケメネス朝ペルシャであった。その後、マケドニア王国、ローマ帝国が中東を支配した時期があった。つまり、これらの時代を支配したのは、多数派であるアラブ人ではなく、インド・ヨーロッパ語族が中東を支配していた。

661年に、ウマイヤ朝が成立し、初の本格的なアラブ人国家が成立した。しかし、10世

紀にはアッバース朝 (750年成立) が衰退し、アラブ人国家としてのイスラム帝国の全盛期は終わった。アラブ人によるイスラム帝国の全盛期は7世紀から10世紀までとわずか400年程度であり、その期間はイメージよりもはるかに短い。1038年のトルコ系セルジューク朝が成立してから、アジア系騎馬民族がイスラム世界で台頭した。

エルサレムは、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教の3宗教の聖地である。11世紀に十字軍が始まるまでは、いずれの教徒も、狭いエルサレムで共存していた。そもそも、3つの宗教はルーツが同じなので、同じ聖典を持つ「啓典の民」として、厳しい対立はなかった。

1096年に、聖地エルサレム奪還を目指す十字軍が侵攻した。十字軍は収奪の限りを尽くしたという。セルジューク朝、それに続くアイユーブ朝 (クルド人) は、十字軍の攻撃を受け、いずれも短命に終わった。これ以降、イスラム教対キリスト教、ユダヤ教の対立が先鋭化した。

(図表 2) 中東の主要な帝国 (アラブ人太字)

| 年代                | 国家                           | 民族          |
|-------------------|------------------------------|-------------|
| 紀元前550年～同330年     | アケメネス朝                       | ペルシャ人       |
| 紀元前868年～同168年     | マケドニア王国                      | ギリシア人       |
| 紀元前27年～1453年      | ローマ帝国、東ローマ帝国                 | ローマ人、ギリシア人  |
| <b>661年～1258年</b> | <b>イスラム帝国 (ウマイヤ朝、アッバース朝)</b> | <b>アラブ人</b> |
| 1038年～1194年       | セルジューク朝                      | トルコ人        |
| 1169年～1250年       | アイユーブ朝                       | クルド人        |
| 1250年～1517年       | マムルーク朝                       | トルコ人        |
| 1256年～1335年       | イルハーン朝                       | モンゴル人       |
| 1299年～1922年       | オスマン帝国                       | トルコ人        |

(出所) 外務省

13世紀以降、モンゴル系のイルハーン朝とティムール帝国が中東北部地域を支配した。14世紀以降はトルコ系のオスマン帝国が台頭し、その支配は1922年オスマン帝国崩壊まで続いた。つまり、過去1,000年の大半は、アジア系民族が中東を支配していたのである。

### ■ 3. 高度な文明を築いた中東

メソポタミア文明、エジプト文明、インダス文明は地理的に近かったため古くから融合した。地理的に、中東は欧州と中国、インドの文化を吸収できる点で有利だった。ルネサンス時代の三大発明とは、火薬、羅針盤、活版印刷術である。そのうち、火薬、羅針盤は中国で生まれたものが、中東を経由して、欧州に伝えられた。

インドの科学や文化は、中東の文明に大いに影響を与えた。インダス文明発祥後、アリア人がペルシャからインドに侵入した。マケドニアのアレクサンダー大王がインド北部を支配したこともあり、欧州、中東、インドをまたぐ

ヘレニズム文化が生まれた。インドの大きな功績は数字のゼロの概念を発見したことである。

やがて、インド数学はアラビア数学として発展し、今でも我々が使う代数学、幾何学などに進化した。そして、アラビア数字 (算用数字) が完成した。また、アラビア語が語源となった英語は多い。たとえば、数学や科学に関連するものでは、アルコール (alcohol)、代数学 (algebra)、錬金術 (alchemy)、アルゴリズム (algorithm) などがある。

さらに、建築物、聖典、美術品、天文学などが大いに発達した。暦と天文学と占星術は宗教と密接に関連する。宮殿の豪華の装飾品に代表されるように、建築、美術も宗教と密接に関連する。中世の航海術もイスラム教徒によって発達した。

### ■ 4. 欧州列強の支配と米国の介入

19世紀以降、ロシア、英国、フランスなど

が中東に本格的に進出した。アジアとアフリカに植民地を拡大していた欧州列強にとって中東は交通の要衝として重要であった。また、ロシアは南下政策の一環として、トルコ、イランに進出した。

20世紀初頭、ドイツの3B政策と英国の3C政策が対立した。3B政策は、中東、インド洋進出を目指し、ベルリン、ビザンツ、バグダッドを鉄道で結ぶ計画である。3C政策は、ケープタウン・カイロ・コルカタへの進出を目指すものである。3B政策と3C政策の対立はやがて第一次世界大戦につながった。

英国は、第一次世界大戦を有利に導くために、以下の協定を別々に結んだ。

#### フサイン・マクマホン協定 (1915年)

英国は、オスマン帝国占領下のアラブ人に対して独立戦争を支援し、アラブ人国家独立を約束した。

#### サイクス・ピコ協定 (1916年)

英国は、ロシア、フランスと、戦後のオスマン帝国の領土の分割統治とパレスチナの国際管理について秘密協定を結んだ。1917年に、革命が成立したロシアは協定から離脱し、英仏で中東を分割統治することになった。

#### バルフォア宣言 (1917年)

英国外務長官バルフォアは、ロンドンのユダヤ金融資本と中東のユダヤ人の協力を得るために、パレスチナにユダヤ人の国家をつくることを約束した。

つまり、英国は、アラブ人には独立を約束し、ユダヤ人にはユダヤ国家建国を約束する

一方で、フランス、ロシアと、中東を分割統治することを裏で約束していた。これが、有名な英国の「三枚舌外交」である。第一次世界大戦後、オスマン帝国の旧領土は、概ね上述の3つの協定や約束に沿って分割された。

ユダヤ人国家の歴史は古く、紀元前10世紀に、最初のユダヤ人国家が建国されたとされる。西暦135年に、ローマ帝国はユダヤ人の反乱を制圧し、ユダヤ人は東欧や地中海沿岸に離散した。欧州で厳しい迫害を受けたユダヤ人は1800年を経てパレスチナに戻るようになった。1948年に、英米の支援でイスラエルが建国され、その後、軍事力で国土を拡張した。つまり、イスラエル問題も欧州の侵略や介入によって生じたものと言える。

中東では、世界のオイル埋蔵量のおよそ半分が存在し、およそ3分の1が生産されている(出所:BP、2018年)。戦後は欧米の石油メジャー7社が生産、供給を支配していたが、1973年の第四次中東戦争、第一次石油危機を契機に、石油輸出国機構(1960年設立)の影響力が増した。その後も、石油権益をめぐって、欧米の介入は続いた。

## ■ 5. イランが各地のシーア派を支援

イランは、他の中東国家とは民族、言語、宗教、文化、歴史などが大きく異なる。イランの民族はアラブ人ではなく、インド・ヨーロッパ語族に属するペルシャ人が多数派である。中

(図表 3) 中東の主要な宗教と民族

| 国／民族    | 宗教（多数派）   | 民族（多数派）            | 人口（万人） |
|---------|-----------|--------------------|--------|
| サウジアラビア | イスラム教スンニ派 | アラブ人               | 3,427  |
| トルコ     | イスラム教スンニ派 | トルコ人（アジア系）         | 8,343  |
| イラン     | イスラム教シーア派 | ペルシャ人（インド・ヨーロッパ語族） | 8,291  |
| イスラエル   | ユダヤ教      | ユダヤ人               | 852    |
| エジプト    | イスラム教スンニ派 | アラブ人               | 10,039 |
| イラク     | イスラム教シーア派 | アラブ人               | 3,931  |
| クルド人    | イスラム教スンニ派 | クルド人（インド・ヨーロッパ語族）  | 3,500  |

(注) 人口は、2019年国連推計。

(出所) 国連、外務省

東で最も早く国家を形成してきたため、イラン人（ペルシャ人）という民族意識が強い。イランの語源はアーリア（高貴な人）から来ている。

地理的に交通の要衝であり古くから繁栄していたイランは、歴史的に多くの列強の侵略を受けた。紀元前330年に、マケドニアのアレクサンドロスがアケメネス朝を滅ぼした。その後も、アラブ人、トルコ人、モンゴル人らの異民族からの侵略を受けた。アケメネス朝滅亡以降の2,350年の間で、ペルシャ人がイランを支配したのは1,271年にとどまる。

19世紀以降は英国やロシアの支配下にあり、戦後は米国が介入を強めた。1953年に、米国は石油国有化を断行したモサデク政権の転覆を主導したと言われる。その後、米国はイランと親密な関係にあった。しかし、1979年に、宗教指導者アヤトラ・ホメイニが国王政権を打倒して以降（イラン革命）、反米に転じた。

ペルシャ人のほとんどがイスラム教シーア派である。イスラム教徒全体の約90%はスンニ派であり、シーア派は少数派である。聖典（ムハンマドの定めた慣習）を重視するのが

スンニ派、指導者の血統（ムハンマドの子孫）を重視するのがシーア派である。シーア派では、イスラム教指導者のことをイマームと呼び、その継承者はムハンマドの従弟であるアリーの子孫でなければならないとする（注<sup>1</sup>）。

アリーは656年にカリフに選出されたが、661年に暗殺された。同年、ウマイヤ家のムアウィヤが事実上のカリフとなり、最初のイスラム帝国であるウマイヤ朝が成立した。ウマイヤ朝を支持する主流派がスンニ派となった。

680年に、ムハンマドの孫でアリーの後継者であるイマーム・フセインは、現在のイラクでウマイヤ家と戦い殺害された（カルバラの戦い）。イマームが殉教した日はアシュラーと呼ばれ、現在、シーア派の最大の行事として人々は喪に服す。このように、シーア派はスンニ派と対立し、その後、少数派として迫害を受けることが少なくなかった。

世界のシーア派人口の4割前後を占めるイランは、シーア派のリーダー的存在である。中東全体の人口が3.7億人だが、シーア派の人口は1.1億人～1.3億人と30%～35%を占め



る（シーア派人口は2009年Pew Research推計）。シーア派は、イラクなどペルシャ湾岸諸国やシリアなどの西方、あるいはイエメンなどの南方に広く分布する。イランがこれらを軍事支援することが、中東の紛争の理由の一つとなっている。

近年、イランとスンニ派の盟主であるサウジアラビアの関係は極端に悪化している。2014年に、シーア派の聖職者ニムル師は国内での暴動を扇動したとして、死刑判決を受けた。2016年に、サウジアラビアはニムル師など47名を処刑した。これをきっかけに、両国は国交を断絶した。

## ■ 6. 米国がイランを敵視する最大の理由

米国がイランを敵視する理由は、主に二つある。

第一に、米国大使館人質事件である。1979年に、テヘランで学生たちが米国大使館を占拠する人質事件（人質は53人）が発生した。1980年に、当時のカーター大統領が人質救出作戦を決行したが失敗し、米軍の隊員8名が死亡した。人質事件が解決するまでに444日間もかかった。以降、イランと米国の関係は決定的に悪化し、今もなお米国は経済制裁を継続したままである。

この事件は、40年以上経た今もなお米国で忘れられていない。事件解決から33年後の2012年に、この事件を描いた映画『アルゴ』が大ヒットし、翌年のアカデミー賞作品賞に選ば

れた。世論調査では、1980年代以降、イランに対して80%以上の人々が反感を持っている。

第二の理由は、米国の同盟国であるイスラエル、サウジアラビアの存在である。両国にとって、イランが最大の敵国である。

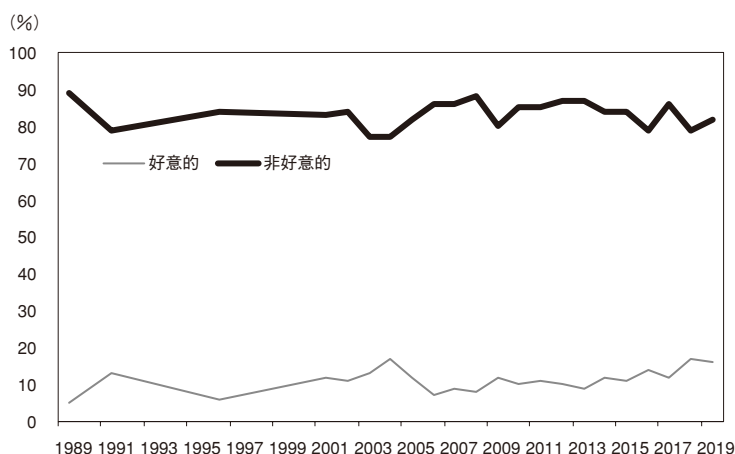
イランとイスラエルの関係は比較的良好であったが、イラン革命後、イランは反イスラエルに転じ、パレスチナを占領するシオニスト政体を拒絶している（注2）。イランは、イスラエル打倒を掲げるレバノンの反政府勢力ヒズボラ（シーア派）、シリアのアサド政権（シーア派の一派であるアラウィー派）を支援する。同じくイスラエルと対立するパレスチナのガザ地区の武装組織ハマスやジハードはスンニ派であるものの、これもイランが支援する。

さらに、イランの核開発はイスラエルの安全保障にとって潜在的な脅威である。こうして、今や、イランはイスラエルにとって安全保障を脅かす最大の敵国である。

歴史的に、サウジアラビアはシーア派国家であるイランとは対立・緊張関係にあった（注3）。サウジアラビア東部にもシーア派が存在し、1979年のイラン革命の際、サウジアラビア国内でも暴動が発生した。そのため、イラン・イラク戦争では、イランからの革命が波及しないよう、イラクに対して資金援助を行った。

イエメンでは、2012年に、スンニ派のハーディ政権が成立したが、2014年にシーア派の武装組織フーシが首都サヌアを占拠し、支配地域を拡大している。そこで、2015年に、サウジアラビアは、アラブ有志国とともにイエ

(図表4) 米国人のイランに対する世論調査



(出所) Gallup

メンに対する軍事行動を開始した。そのフーシを支援するのがイランである。

## 7. 米国とイランの対立は長期化しよう

米国では、今年11月3日に大統領選挙と議会選挙が実施されるため、国内向けにも対外強硬策を実施する方向になりやすい。大統領選は、トランプ大統領有利の予想ながらも、民主党から中道の政策を掲げるバイデン元副大統領が指名を獲得した場合、接戦が予想される。

トランプ大統領の最大の支持基盤は、人口の25%を占めるキリスト教福音派である。福音派は聖書の教えを重視するが、その聖書(旧約聖書)とはユダヤ教の聖書タナハである。つまり、福音派とユダヤ教徒は同じ聖書を持ち、強い親近感を持つ。米国の政治献金額上

位10名(2017-2018年)は全員ユダヤ人であり、その政治力は強い。つまり、トランプ大統領が親イスラエル政策と反イラン政策を実行すると、福音派の票とユダヤ人の資金の両方が得られることが期待される。

トランプ大統領は、在イスラエル大使館のエルサレム移転やイスラエルのゴラン高原領有承認など親イスラエル政策を強力に推進してきた。さらに、核合意離脱、イラン制裁強化など対イラン強硬策を実行してきた。前述の理由から、米国では反イラン感情が強いため、民主党支持者を含めトランプ大統領の対イラン強硬策に強く反対する声はあまりない。大統領選の状況次第では、さらに親イスラエル・反イラン政策を強化すると見られる。

ただし、両国の対立は決定的なものにはなるまい。「米国第一主義」を掲げるトランプ大統領は、中東の駐留米軍の削減を公約として

---

いる。世界一の原油生産国になった米国としては、中東の権益はかつてほど重要ではない。米国や同盟国にとって、このままイランを封じ込めることが、最も国益に叶うのかもしれない。

イランとしても、米国と正面から軍事的に対決することは避けたいはずである。ただし、シーア派の盟主として、イラン国外のシーア派に対する支援をやめるという選択肢は取りづらい。

結論として、米国とイランは決定的な対決は避けながらも、緊張関係が続くであろう。そして、トランプ大統領が再選された場合、

緊張関係は長期化することが予想される。

(注1) 松本弘「イマーム・アリー廟」(日本国際問題研究所、研究活動、2004年8月30日)、「シーア派(12イマーム派)」(日本国際問題研究ウェブサイト／キーワード(用語解説))

(注2) 佐藤秀信「第6章 イランにとっての中東和平問題」81～94頁、日本国際問題研究所「中東和平の現状—各アクターの動向と今後の展望」(2011年3月)

(注3) 福田安志「サウジアラビアの対外政策とその変化—対米関係を中心にして—」(ジェトロ、2014年3月)

